
第 5 章 幼少期Ⅱ：1947 年頃～1949 年頃 (10～12 歳)

ロバに蹴られる

割礼の後、学校に復帰してからは、私の勉強は速い速度で進んでいった。力も強くなってきたので、家族を助けて少し働くように言われた。コーラン学校に通うかたわら、授業の後や休みの日（木曜終日、金曜の午前中、水曜の午後が休み）、私はロバの背に家畜の糞を積んで農園に運んだ。これは、たやすい仕事だった。往きはロバの後ろから付いていき、ロバが脇にそれようとする手を持った棒で正しい方を向かせ、還りは荷を下ろしたロバに乗って駆けて戻った。道で学校仲間に合うと、交代して乗せてくれとよく頼まれたものだ。空のロバの背に乗り飛び跳ねるように駆けさせるのは、実に楽しかったからである。同じようにロバを連れた友達に出会った時は、ロバの駆け比べをして楽しんだ。全くおもしろい遊びだった。もっと年上の体の大きい子供は、一度に何頭ものロバを御すことができ、中には 4 頭も引いて行ける者もいた。時々オスのロバ同士で喧嘩になったが、そういった時この動物たちを引き離すのは至難の業で、時にはどちらか、あるいは両方のロバがひどく怪我することもあった。ロバは、たいてい喧嘩相手の足を狙って噛みつくのだが、怪我したロバは何週間も働けなくなってしまう。最も凶暴なロバに至っては、彼らを使う子供さえ噛もうとするので、口籠をはめなければならない。一旦喧嘩を始めると、ロバは傍にいる人間さえはずみで噛むことがある。私も、こうした家の手伝いをしている時、ロバからとんだ災難をお見舞いされた経験が二度ある。ある日、荷を積みやすいように、ロバの尾を引っ張って少し後退させようとしたところ、この動物は後ろの蹄で私を蹴り上げた。蹄は私の鼻の左側に当たったが、この一撃はかなり強力で私は一瞬眼の前が真っ白になった。傷は深く、出血は病院で縫合してもらってやっと止まった。しかし、傷跡は今でも残っている。二度目は、別のロバから鼻梁の真ん中を蹴られた。これは、一匹の頑固なロバに荷を積もうとしていた時に起こった。このロバに私は顔がゆがむほど蹴られ、はずみで吹っ飛んで仰向けに倒れ、血が夥しく流れた。私は失神したらしく、気が付いたら病院にいた。この時は回復するまで何週間もかかった。



ロバは最近まで活躍していました：男の子を撫でているのがハジ氏（2002 年記者撮影）

ゾーラ伯母さん詐欺に会う

子供の頃私は好奇心の固まりで、周囲で起こることを何でも知りたがったものである。ある時、伯母のゾーラの所に、一人の見知らぬ男がやってきて、寝泊りするようになった。当然私は非常に好奇心をかき立てられた。確か 1940 年代のことだったと思う。背の高い、黄色のジグザグした形の勲章を付けたアラブ人だった。彼は、自分はモロッコのフェズ出身で、ウーレド・シディ・ベン・ムーサと言う名だと自己紹介した。そして、自分には隠された宝を見つける能力があるのだと言った。彼は、伯母の農園の西に宝が隠されていることを遠くから感知し、ここへ来たと言った。お人よしの伯母は、たやすく騙され、もろ手を挙げてこの男を歓迎した。彼は、悪魔が邪魔しているのだから、宝を手に入れるには何週間もかかるだろうと説明した。私は口をあぐり開けて彼の話を聞いていたが、頭の中は想像の悪魔のイメージでいっぱいになった。この日から私は、彼が宝を掘り出すのを見逃すまいと、一日中この男の後をついて回った。

男は伯母の農園へ行くと、まず地面に腰を下ろした。伯母は急いで敷物を持って行って「どうぞこちらにお座りください」と言い、男は半分腰を浮かせてそれに座りなおした。男は伯母の心を完全に掴んでおり、嘘で作り上げたこの信頼を存分に利用するつもりでいたらしい。彼が水を飲みたいと言うと、伯母は飛んで行って、器を丁寧にすすぎ、ゲルバ（Guerba：ヤギの皮で作った水筒）から水を満たした。そして私にそれを持っていくように命じた。

「ありがとう、息子よ。君も大きくなったら、立派な宝物のハンターになれるよ。」この言葉に私は有頂天になり、私も彼の虜になってしまった。次に彼は砂地を手で平らにならし、四角い板を置いた。それはチェス盤に似ていて、12ばかりの穴が穿ってあった。

穴の一つに指を入れ、出しては別の穴にいれるということを何度か繰り返した後、男は顔を上げ、鋭い眼差しで周囲を見渡した。その視線は少し怖いようだった。そして「カザナ・ファタクザニ…」というような、意味の分からない呪文をもごもごと唱えた。その時彼は私が傍でじっと見ていたのに気づき、「あっちへ行っていなさい」と厳しい声で命じた。私は従った。男はもう一度同じことを繰り返した後、伯母に言った。

「確かに宝が隠されているが、これを取り出すには、かなりの労力が必要だ。まず、なによりも宝を抱え込んでいる悪魔を追い散らさなければならない。」

そうして千一夜物語のように、毎日巧みな嘘の物語を語り続けた。そうこうするうち、家庭内に悩み事を抱えた女たちが、彼の超能力で解決してもらおうと集まるようになった。彼は、そんな女たちに小さな紙片を与え、それを水に晒し、その水を夫や子供に飲ませるようにと言ったり、あるいは紙片を炭で燃やして、その煙を病人や、言うことを聞かせたい人物に嗅がせるように言ったりした。頼みごとをしにやってくるのはほとんどが女だったが、たいてい彼女らは高い礼金を要求された。

男はゾーラ伯母さんを騙し続けた。

「悪魔は私には手出しできない。私は悪魔に立ち向かう術を心得ているからだ。しかし、やつ目のつぶすには、二人の若者の助けが必要だ。彼らに、悪魔が嫌う臭いの香を焚いた器を持たせ、私は二人の間に立ち、秘密の呪文を唱えて悪魔を動けなくする。悪魔が動けないでいるうちに、私が指で合図したら、三人目、できたら女性がいいが、その者が宝を掘り出して、左右を振り返らずに後ろ向きに後ずさりしながら一気に逃げるのだ。」

そのところまでは覚えているが、小さかった私は急に眠気に襲われ、後の話はよく覚えていない。しかし、後から人に聞いたところによると、「来週はちょっとイン・サラマまで行ってくるが、すぐ戻ってくる。それまでに準備を整えておくように。」と言ったらしい。男は二度と戻ってこなかった。そして、その後宝の話が人の口の端に登ることも二度となかった。男が実は、お人好しの人間を狙う詐欺師だったと、大きくなってから私はようやく理解した。

子供にはつらいフォガラ浚渫の仕事

父が仕事を求めて遠方へ行きアウレフを留守にしていた 1947—1948 年(10～11 歳)頃、私たち一家は生活の糧に事欠くようになり、私は必要に迫られて、当時の私の年齢くらいの子供にはいささかきついフォガラ浚渫の仕事をするようになった。地上から 20 メートル下を流れる水路の中で、足首まで水に浸かってする仕事である。水は時には膝まで来ることもあった。真っ暗な狭い水路で泥を浚うのであるから、つらく骨の折れる仕事だった。地下 15～20 メートルのフォガラの底まで降りるには、まず竪井戸の口から中へ吊るしたロープにつかまり、井戸の壁両側に穿った 15 センチ四方ほどの穴に足をかけて降りていく。この穴は、階段の役目を果たしており、右足を一つ下の穴に移したら、次は左足を一つ下へという具合に順番に降りていくのだ。万が一のために命綱のロープを手をかけ、慎重に歩調を調整する。井戸に入る前には、地上で「ビスマッラー (besm'llah)」(神の名の下に)

と神の守護を求めて祈りを捧げる。そしてカーバの方角を向いて井戸に入っていく。井戸の底へ着いたら、今度は堅井戸と堅井戸の間を水平方向につなぐ地下水路を進まなければならないが、このヌファド (n'fad) と呼ばれる水路の一区間 (二つの堅井戸の間) の長さは最低でも 18 メートルある。堅井戸の入口から漏れる明りは、せいぜい 2 メートルほど先までしか届かない。私の仕事は、ヌファドの水の流れを滞らせている堆積した砂を手ですくって大籠に入れることだった。籠が砂でいっぱいになると、籠に着いている二つの取っ手に手をかけて背中にしよい、暗闇の中を手探りで堅井戸のところまで戻る。籠には地上から垂らしたロープが結び付けられていて、ロープの反対の端には同じような籠が結び付けられている。地上では別の作業員二人が待っていて、いっぱいになった籠を引き揚げ中身を捨てる。地下の作業員は籠がいっぱいになったら大声で叫び、引き揚げるよう地上の仲間と合図する。空の籠が返ってきたら、またすぐに暗闇の中へ引き返し、堆積した砂が無くなるまで何回でも同じことを繰り返す。一人が地下で作業する時間は、一回でおおよそ 4 時間くらいだった。



フォガラのはじ家の井戸の入口：アウレフの町の郊外 (2002 年記者撮影)

私は、まだまだ子供だったので、初回の時は、水が凄まじい音を立てて流れる暗闇が恐ろしく、不安で胸が締め付けられるようだった。初めは、指導役の大人が一緒だったので、「男なら何があっても恐れてはいけない。」などと励ましたり、「まだ子供なのに偉いな。」などとおだてたりしてくれた。その後も時々、監督役の大人が作業の指示をしに降りてくることがあったが、彼らが水の中を歩くと、私の時とは違ってものすごい音がしたので、一体彼らは足で何を地下から湧き出させているのか、と想像をたくましくしたものである。後から思うと、単に体が大きい分、水の抵抗も大きかっただけのことなのだが、子供には暗闇は本当に怖かったので、変に想像をたくましくしていたのだろう。大人の中には、年少者を安心させるために歌を歌いながら水路を歩いていく者もいた。砂が固まりになっている所をカルル (karrar) と呼ぶ。カルルの出来ている個所では、水は本当に恐ろしい音を

立てる。上流から下流に滑らかに水が流れるよう、こうした砂の山を取り除くのが私の仕事だった。なお、フォガラの中では、仲間の作業者が遠くから「サラーム (salam)」(注：平安。「こんにちは」の意) という声が聞こえたら、その声がどんなに微かでも同じく「サラーム」と応えなければならない習慣があった。こして何日か働くうちに次第に狭い暗い環境には慣れていったが、重労働である点は変わらなかった。狭い水路の側壁で足の指を擦ってしまい、血が出ることも度々あった。仲間の中には肩や尻をすりむく者もあった。こうした困難さにも拘わらず、年少者への報酬は僅かなものだった。賃金は週毎に支払われるが、大人が一日 4 時間で 25 フランだったのに対し、子供は同じ時間働いても半分の 12.5 フランしかもらえなかった。これは当時ドイツ 1 キロ半にしかならなかった。

宗教行事二つ

ライラトゥ・エル・カドリ (Lailatou El Kadri)。この祭りは、ラマダン月 (訳注：第 9 月の断食月) の第 26 日目の夜の儀式で、信者は翌日にかけてこの夜を徹夜する。私は 12 の年からタレブに許されて、この祭りの夜には、モスクの礼拝でコーランの斉唱に加わるようになった。ライラトゥ・エル・カドリの夜は、天使が空から降りて来て信者とともに過ごすと思われており、信者にとって最も神聖な時の一つである。コーランにも、この夜の重要性は、通常の一月の千倍にも相当すると書いてある。預言者はラマダン月の最後の十日間が特に重要だと教えており、この期間の一日たりとも礼拝をおろそかにしてはならない。なお、ライラトゥ・エル・カドリが最後の 10 日間のどこに当たるかについては、神学者が慎重に検討した結果、26 日目の夜から 27 日目にかけてと決められた。信者は、この時夜通しコーランを唱えて祈りを捧げる。斉唱には先導役がいて、まず彼が一説を唱え、一堂に並んだ信者が後に続けて唱える。夜明けまでにコーランの 60 節を唱え終わらなければならない。一人の先導役が、どれくらいの数の節を担当するかは各自の能力によって決められる。先導役になるには、タレブの前でコーランの節を何も見ないで斉唱してみせ、自分の能力を証明しなければならない。

ライラトゥ・エル・カドリの準備は何か月も前から始められる。タレブは、生徒の能力に応じて、途中で途切れたり間違えたりしないくらいの長さの節を各自に割り振るが、それは半節だったり、2 節だったり、時には 5 節だったり様々だった。こうした競争は、結果的に子供たちに聖なるコーランの重要性を分からせるのによい機会となったが、一方で、単なる子供たちの見栄の張合いにもなりがちだったのは否めない。曰く、誰々は上手に読んだ、誰々は良い声だった、誰々はつかえた、誰々は沢山間違えたから斉唱に参加する資格がない、云々と。私の場合、12 歳でタレブからお許しが出て、1～2 カ所のモスクで 3 節を斉唱するようになった。しかし、当時の私は、心はまだまだ幼く、この行事の真の宗教的な意味は理解しておらず、虚栄心を満たしていただけだったように思う。タレブにとっては、生徒がこのように宗教行事に熱心であればあるほど、それは彼の教師としての有能さの証明となり、地元社会の中で高い評判を獲得することとなった。

エル・バシール (El Bachir)。これは預言者ムハンマドの善き行いを讃える物語を大きな

声で一節ずつ読み上げる行事である。この祭りでは、信者は紙に書かれた文章を読み上げていく。生徒のうち上手に節を付けてつかえずに読める者が、これへの参加を許される。預言者の誕生月(第 3 月)の初日から毎夜、一日の最後の礼拝「エル・エッシャ (El Echa)」の前、1 時間から 1 時間半かけて物語を読み上げていく。預言者生誕の前夜に当たる 11 日目の夜は、皆で夜明かしし、翌日の正午まで読み上げを行う。なお、8 日目は、早朝から「エル・アサール (El Asr)」(訳注：日没前の礼拝)までの間ずっと読み上げを行う。11 日目の祭の方では、読み上げへの参加者は晴れ着に身を包んで出かけ、参加者の家族は、参加者全員に食事を振舞う。また、11 日目の夜から 12 日目の朝にかけては踊りも催された。